

暮らしを彩った 機械たち



平成26年1月3日(金)～3月16日(日)

三島市郷土資料館

開館時間 9:00～16:30

休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)

入館料 無料(ただし、楽寿園の入園料として
大人300円/小中学生50円)

〒411-0036 三島市一番町19-3(楽寿園内)

TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>

明治以降、暮らしを便利に変えるさまざまな機械たちが、外国から輸入されたり新しく発明され、紹介されました。当初はごく一部にしか受け入れられなかった機械たちも、改良や低廉化を経て少しずつ各家庭にも広まり、人々の生活を豊かにしていきました。

当館には三島やその周辺の家庭で使われていたさまざまな機械たちが多く収蔵されています。今回の企画展では、かつて人々の生活を豊かに彩った機械たちを通して、生活の変化や当時の暮らしを紹介していきます。

快適に暮らす

— 涼しい夏を運んできた「扇風機」 —



電気扇（扇風機）

暑い夏をうちわで乗り切るしかなかった時代、自動であおいでくれる扇風機は憧れの電化製品でした。発売されたのは明治時代ですが、一般家庭に広まるのは大正時代から昭和のはじめごろです。呼び

名も今と違い「電気扇」といわれていました。昔の扇風機は鉄でできており、真っ黒でとても重いものでしたが、形は今のものとほとんど同じです。

— 食べ物を冷やせるようになった「冷蔵庫」 —



木製冷蔵庫

上のドアの中に氷を入れ、下のドアの中に入れた食べ物を冷やします。

家庭に広まりはじめた頃の電気冷蔵庫です。カギがついていますよ。つまみ食いしないようになかな？



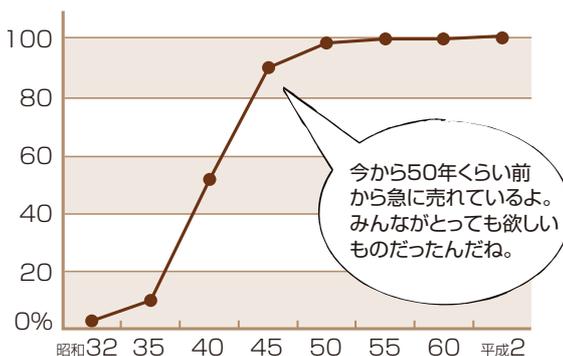
電気冷蔵庫

昭和 30 年代後半発売

冷蔵庫のない時代、食べ物を冷やすには井戸や川の水を使うしかなく、あまり冷えないうえにくさらせないよう注意するのは大変なことでした。

そこで利用されていたのが氷を入れて冷やす冷蔵庫ですが、氷の入れ替えなど手間がかかりました。

電気冷蔵庫が家庭で使えるようになったのは昭和 30 年代、今から約 50 年前ごろからです。食べ物を冷やしておけるため「買い置き」ができるようになり、暑い夏には家でよく冷えた飲み物を楽しむことができるようになりました。



今から50年くらい前から急に売れているよ。みんながとっても欲しいものだったんだね。

電気冷蔵庫の普及率(内閣府 消費動向調査より)

遠くと繋がる

— 急ぎの用事も大丈夫！「電話」 —



壁掛け式電話 明治時代

家に電話がないころは、電話をかけるといえば「大切な急用」のときに公衆電話や近くのお店の電話を貸してもらってかけるものでした。

どの家にも電話があるのがふつうになったのは、昭和40年代以降、今から約40年前ごろからです。ケータイ電話が広まる前は、家に一台しかない電話で友達と長電話をしておこられる、ということもよくありました。

左のロボットのような機械、なんだかわかりますか？
これは明治時代の電話です。今は取れてなくなっていますが、以前は本体の横にハンドルがついていて、それを回してかけました。ロボットの口のようなところが話すところ、左についている黒いマイクのようなものを耳にあて、そこから相手の声が聞こえます。あれ？でもダイヤルもボタンもないよ、って？

むかしは電話番号を押して直接相手とつながるのではなく、ハンドルを回すとまず電話局の交換手につながり、そこで話したい相手の番号を伝えてつなげてもらって、ようやく相手とお話しできました。時には待たされることもあったようです。



卓上式電話 大正時代

話すところと聞くところが一つの「受話器」になりました。



卓上式電話 大正時代

受話器はシンプルになりましたがダイヤルはありません。



自動式電話（黒電話）昭和40年代から

交換手を通す必要がなくなり、ダイヤルがつけました。

時を知る

— せいよう 西洋からやってきた新しい「時間」を教える 「はしらどけい」 —



このような機械式の時計は振り子やテンブ（特殊なバネを使った部品）が時をきざみ、ゼンマイの力で動いていましたが、いまから50年くらい前から、クォーツ（水晶）の振動が時をきざみ、電気力で動くものになっていきました。現在では、正確な時を知らせる電波を受信して自動で時刻を調整する「電波時計」もあります。

ぼーん、ぼーん、と大きな音を立てて時をきざむ柱時計、みなさんは実際に動いているところを見たことがありますか？下の窓から見える振り子によって時をきざんでいます。

また、この時計はゼンマイで動いていました。そのため、ずっと動かし続けるためには何日に一度、ゼンマイを回さなければなりません。 「4」と「8」の近くにある穴にカギのような部品を差してゼンマイを巻きます。

時計の中には歯車などの部品がぎっしり詰まっています（右の写真）、こまめな手入れや修理が欠かせませんでした。



時計の中には様々な部品が

江戸時代以前から日本では様々な時計が作られてきました。明治に入り、日本の時刻の表示が西洋と同じものになるとたくさんの時計が輸入されるようになりました。輸入品は高価でしたが、だんだん国産品が作られるようになり、家庭に広まってきました。



柱時計



懐中時計 昭和初期



時計修理用工具

き ろく のこ 記録に残す

—思い出を形にできるようになった「カメラ」—

むかしのカメラはとても高価で使い方も難しく、持っている家は限られていました。写真は学校の卒業写真など何かの記念に特別に撮ってもらうものでした。

社会が豊かになってきた今から約50年ほど前の昭和30年代ごろ、使い方が簡単で手頃な値段のカメラが発売され、旅の思い出や家族のちょっとしたお祝いなど、写真を撮る機会が増えました。昭和40年代にはカラー写真がふえ、動画が撮影できる家庭用8ミリフィルムカメラも発売されました。

今のようなデジタルカメラが広まる前はフィルムを入れて撮影するカメラで、どんなふうに撮れたかその場で確認できないため、現像してみたら失敗していた、ということがよくありました。



戦前のカメラ

フィルムではなくガラス板で撮影しました。

昭和20～30年代の思い出

「押し入れを暗室にして家で父が現像していたわ。現像液の中でちゃぶちゃぶさせてもらうのが楽しかった。」



8ミリフィルムカメラ

(フジカシングル8 Z1)

昭和40年発売

家庭でだれでも簡単に動画が撮影できるとして人気となりました。



二眼レフカメラ

(リコーフレックスモデルVII)

昭和29年発売

ピント合わせ用と撮影用の二つのレンズがついていて、上からのぞいて撮影するよ



コンパクトカメラ

(フジペット35)

昭和34年発売

初心者向けカメラ。子どもや女性にも扱いやすくシリーズ全体で100万台近く売れたヒット商品でした。

えい ぞう 映像を楽しむ

— 光で絵を映す「幻灯機」 —



幻灯機



ガラス製の幻灯機用スライド



昭和 20 ~ 30 年代の思い出

「父が近所の子どもたちを集めて、社宅の空き部屋でよく幻灯機を写してくれたわ。」

「子ども会の集会で、劇をしたり歌を歌ったり幻灯を見たり、とても楽しかったよ。」



ライオン映写機 昭和初期か
古い映画のフィルムを家庭で写せる
おもちゃです。



スライド映写機
スライドがガラス製から写真フィルムに
変わりました。



— スポーツやアニメがお茶の間に！「テレビ」 —



白黒テレビ 昭和 30 年代後半
当初は 4 本の脚がついていました。

テレビがない時代、幻灯は子どもたちにとって大きな楽しみでした。幻灯とは中に入れた電球などでスライドに描いた絵を大きく映して楽しむもので、映す内容は昔話や歴史物語、めずらしい風景や動物などさまざまでした。

昭和 30 年代、今から 50 年ほど前ころから家庭に白黒テレビが広まり、昭和 40 年代ころからカラーテレビに変わっていきました。テレビは「お茶の間」(食事をしたり家族でくつろぐ部屋)に置いてあり、スポーツ中継やアニメ番組、海外ドラマなどを家族みんなで楽しみました。

音を楽しむ

—家で音楽を楽しめるようになった「蓄音機」—

みなさんは音楽を聴くのは好きですか？家で音楽を楽しめるようになったのは今から100年以上前の明治時代中ごろ、蓄音機が登場してからのことです。最初はとても高価で、一部の人の楽しみでしたが、大正時代には全国に広まり、それまで上演会場に足を運ばないと楽しめなかった優れた音楽を誰でも家庭で楽しむようになりました。

なんか聞こえる！



蓄音機 大正時代

ホーンが中におさまって、すっきりしました。

蓄音機 明治時代

ハンドルを回すと大きなホーンから音が流れます。



左：電気蓄音機

右：ポータブル蓄音機

昭和初期か
持ち運びできるバッグ型です。



ラジオ 昭和初期

スピーカーにつないで聴きます。

—初めての放送メディア「ラジオ」—

日本でラジオ放送がはじまったのは大正14年(1925)のことです。初期のラジオ受信機はヘッドホンを使い一人で聴くものでしたが、スピーカーの登場によりみんなで楽しめるようになりました。ニュースや語学講座のほかラジオドラマや音楽、子ども向けプログラムも放送され、人々の大切な情報源であっただけでなく家族みんなが楽しめる娯楽でもありました。



ミゼット型ラジオ 昭和初期
スピーカーと一緒にになりました。



ラジオ 昭和20年代後半



FM-AM ラジオ 昭和30年代後半

ファッションを楽しむ

—準備いらずでシワとりが楽に「電気アイロン」—

電気アイロンが広まるまで、衣服のシワを取るには炭火を入れて使う「火熨斗」や炭火アイロンが使われていました。大正時代に電気アイロンが登場し、昭和のはじめには一般の家庭でも使われるようになりました。炭をおこす必要がなく使いたい時にすぐ準備できる電気アイロンは、毎日の家事を少しラクにしてくれる、お母さん待望の機械であり最も早く家庭に広まった電化製品のひとつです。



火熨斗
平安時代から



炭火アイロン
明治時代から



電気アイロン
大正～昭和初期から



スチームアイロン
昭和30年代ごろから

—憧れの洋服は手作りで「足踏み式ミシン」—

ミシンは明治時代に家庭に広まり、40年ほど前までは足踏み式や手回し式のミシンが主流でした。若いころに洋裁学校に通い、結婚して子どもができると子どもたちのために洋服を作ってあげる女性がたくさんいました。

現在はコンパクトで様々なぬい方が簡単にできるミシンが何種類も発売されていますが、かえって棚の奥にしまったまま、という家庭も多いのではないのでしょうか。



上：足踏み式ミシン
下左：手回し式ミシン
下右：裁縫学校で使用した洋服見本

企画展「暮らしを彩った機械たち」パンフレット
発行日 平成26年1月3日(金)

主催：三島市郷土資料館創造活動事業実行委員会・三島市教育委員会
平成25年文化庁地域と協働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業